

令和6年3月5日

言葉だよりNo.11 (第421号)

「言葉は救う」

校長 児島 万代光

「令和6年1月2日に高校時代の同窓会があります」との案内がありました。

28歳、初めての同窓会。「えっ、誰やったっけ」。高校卒業後、わずか10年で、見た目が大きく変わってる同級生たちが何人もいました。けれども、話し始め、しばらくすると、高校の時のままの同級生たちがそこにいました。

当然、次の30代での同窓会にも参加しました。それから20年近くぶりの同窓会だと思います。案内が来て、うれしくてワクワクしました。同級生の顔がたくさん浮かんできました。しかし、すぐに現実に戻りました。私は「不参加」に○を付け、返信をしました。家族の介護の状況から、直前のキャンセルで迷惑をかける可能性が高いと思ったため、「参加」に○を付けることができず、心の中に芽生えた同窓会への思いにそっと蓋をしました。

その後、しばらくたったある日、他の高校で教員をしている同級生から、連絡がありました。「同窓会の事やけど。少し事情は聞いてる。もし時間できたら、当日連絡なしでも来たらええけん。一次会の途中でも、二次会の途中でも、ちょっとだけでも来たらええけん。俺が都合付けるけん。全部なんとかするけん・・・」

思いがけない連絡・言葉に、涙があふれ、しばらく止まりませんでした。涙が心にジーンと染みこんできました。高校の同級生とは、15歳で出会って、もう40年以上も経っています。その頃と変わらない、純粋な優しい心から発せられた相手を思いやる言葉に、私の沈みかけた心は救われました。

1月1日の能登半島地震。アナウンサーの方が、過去のテレビでは見たことのないような絶叫に近い口調で、避難を呼びかけ続けられていました。

1月2日の航空機事故。燃えあがる機体の中で、客室乗務員の方が、落ち着いた行動を促す言葉をかけ続けられていました。

今回の大災害、大事故の中でも「言葉によって救われた命」がありました。

言葉は、人を救う力となります。

あなたの言葉で、救われる人がいます。

心は、言葉に姿をかえます。

言葉は愛です。